

# 昔のこども会

◎福岡県久留米市

## 地域食堂で、人も食も循環する



福岡県久留米市安武町は、高齢者の多い農村地帯。このまちで、コミュニティづくりに力を注ぐのが、自宅を開放して高齢者の集いの場や障害者の住まいの場を提供する「昔子ども会」の三原圭子さんと、障がい者支援を行う社会福祉法人「拓く」常務理事の馬場篤子さんだ。

三原さんは、「地域で支え合うことはごく当たり前。向こう三軒両隣のつながりを大切に」という考えから、70歳代以上の“昔の子どもたち”に声をかけて毎朝ラジオ体操をして、その後にお茶を楽しんだり、料理教室や手芸教室、ゲートボールを主宰するなど、つながりを自然につくってきた住民だ。現在は地区社協の会長であり、「拓く」の後援会「ポレポレ倶楽部」の副会長でもある。

一方、馬場さんは、ひきこもりや虐待など地域に内在する課題への支援を研究するなかで、支えの必要な人たちがこのまま急増すると専門家や既存のサービスでは対応できなくなると痛感し、法人のあり方を転換した。これからは支え合えるコミュニティづくりが必要という視点に立った事業展開やまちづくりをしている。そのなかで、近所に住む三原さんと出会い、障がい者のケアホーム「三原さん家」を自宅につくってもらったという。

三原さんと馬場さんは、子育て支援のNPO法人と一緒に、多世代交流を目的とした「ミニミニ子ども祭り」（全2回、

延べ170人の子どもが集まった）を開催したり、2010年度からは、もっと多くの人の交流をつくりたいと「三原さん家」を「地域食堂」として開放するなどしている。

「地域食堂」では、毎週金曜、昼食を300円（材料代）で提供している。料理するのは地域の人で、地域で採れたものや頂きものを手際よく調理する。選べるメニューもなく派手さもないが、心落ち着く食堂である。おいしい食事を囲めば自然とおしゃべりが始まり、自然な交流が生まれる。毎回40人ほどが集まり、つくる人も食べる人も楽しみながら、その交流は広がっている。人も食も循環し、「みんなが得をする」場ができています。

馬場さんは、三原さんがもつ個人の力が、地域のカへ広がることが大切だと考えている。キーワードは、「誰もが」「隣人」「混ざり合い」だ。コミュニティづくりには「誰もが」という視点が求められるし、地域という言葉は「隣人」に置き換えられる。そして、世代を超えて「混ざり合う」、コミュニティをつくらなければならない。これからも人も食も循環し、支えあえる土壌づくりを目指す。

